

○堀口恵子* 嶋村 孝* 六平いく子* 押田敏雄**

(*明和学園短大 **麻布大)

< 目的 > 鶏卵は国民が一日一個は食べている身近な食品の一つである。栄養に富み消化吸収もよく、安価で物価の優等生とも呼ばれている。しかし、味についてはいわゆる記憶の中での「昔の卵が美味しかった」というようなことも耳にする。そこで、今後の卵の消費拡大に寄与する事を目的とし、昔の卵と現在の卵で味や嗜好性に差があるのかどうかを明らかにするために年代別の意識調査を行った。

< 方法 > 期間：1999年.10月～11月 調査方法：1) アンケートの対象者は青森、神奈川、兵庫、岡山、愛媛、鹿児島 の6つの県の畜産フェアの来場者と群馬の短期大学の文化祭の来場者、合計7県の消費者で1,111(男227.女884)名である。その内訳は、10代84名、20代122名、30代183名、40代262名、50代246名、60代213名である。2) アンケート調査用紙を配布し無記名で記入させた。3) アンケート回答率は94%であった。

< 結果 > 1) 家庭での摂取状況は、年代別に差はあるが40%の人が毎日食べていた。2) よく食べる調理方法は、目玉焼き21%、厚焼き卵19%、ゆで卵15%、炒り卵10%、生卵10%、かき玉汁8%、茶碗蒸し5%の順であった。3) 美味しい卵料理のポイントは、鮮度60%、味22%、調理法を13%の人があげていた。4) 味においしさの差があるかでは、69%の人が差があると解答し、年代が高くなるにしたがい差があるとする人が増加した。5) 購入の目安は、鮮度37%、価格24%、殻の色10%、販売店9%、生産者7%、銘柄6%であった。6) 日付け表示を知っていますかでは、知っているが全体で84%であり、低年齢層では65%であった。